

マラウイ滞在記

鉄鋼事業部 技術G 藤尾 和樹

この度、福寿喜寿郎さんとNPO法人Color bathの皆さん、自然エネルギー財団研究員の山東さんが計画されているアフリカのマラウイへの支援活動「ソーラーボイラープロジェクト」に同行させていただきました。

○マラウイの現状

マラウイでは慢性的な電力不足のため、料理やお湯を沸かすのに薪を使用しており、エネルギーの90%以上が薪の使用に依存しています。

近年、人口の増加とともに薪を採る木が枯渇し、家から数時間も離れた場所まで薪を拾いに行かなくてはならない地域もあり、お湯を沸かす薪が無く井戸

プロジェクトの目的です。

○活動内容

私達が主に活動したのはマラウイの北部に位置するムジンバという町で、日本から韓国とエチオピア経由でマラウイの首都リロングウェに人国し、そこから車で4時間程走ったところにあります。

今回の活動では、ムジンバ県の集落に1台、マニャムラヘルセンターに2台、県立病院に1台、合計4台のソーラーボイラーを組み立て、使用方法の指



導とデモンストレーションを行いました。集落では芋、豆、米、卵などを使用したマラウイ料理を試みました。その日は曇りがちだったので、調理ができるか不安でしたが、マラウイの日差しは強く、晴れ間が見えると一気に温度が上がりました。また、別日にはパンを焼くことにも成功し、集落の人々は私の想像していた以上に大喜びで踊り出すほどでした。よく考えてみれば、日本ではソーラーボイラーでの調理に失敗しても、他に食べる物もあれば調理方法もありますが、マラウイでは数時間もかけて薪を拾いに行く作業がなくなるわけですから、マラウイ主婦達の大喜びも当然です。

マニャムラヘルセンターと県病院では医療器具の煮沸消毒と乾熱滅菌を試みました。医療

器具の滅菌には各国ごとに基準があるので、それを満たしているかどうかの調査が必要ですが、煮沸はできていたので可能性はあると思いました。

○ホームステイ

ソーラーボイラーを設置した集落に、マラウイ人の生活様式を知るためにホームステイをしたので、その様子も報告します。

まずは食事ですが、写真の上の方にある白い塊が主食の「シマ」と呼ばれるトウモロコシの粉を蒸してのり状にしたもので、おかずは右からカボチャの葉、卵焼、ビーンズです。素手でシマを少し握り固め、それでおかずを拗るように食べます。

味付けはシンプルですが、意

外と美味しくいただけました。

水を井戸まで汲みに行き、バケツを頭に乗せて運ぶ体験もさせてもらいましたが、集落に帰ってくる頃には私の服はびしょびしょでした。トイレは穴で、お風呂はバケツ、日本人にとっては過酷な環境でしたが、とても貴重な体験ができて良かったと思っています。

○休日

1日予定のない日ができ

たので、一緒に活動していた4人でマラウイ湖まで観光に出かけました。マラウイ湖は琵琶湖の46倍の大きさで、一見海のようにも見えますが、対岸にはタンザニアとモザンビークが見えるとても美しい場所でした。

○活動を通じて

マラウイという国は、世界でも最貧国のひとつと聞いていたので、訪問前は悲痛な暮らしを想像してしまっていました。ですが、実際に訪れてみると人々はみんな優しく、子供達の笑顔の絶えない国でした。とはいえ、森林伐採の問題や衛生面、健康面で課題がたくさんある国であることも事実なので、一人でも多くの人々が幸せになれる世界を目指し、今後も虹技の皆で支援を続けていけたらと思います。

